



巻頭言

会社で研究開発に携わる人達へ —日本の化学産業の飛躍を願って—

蜷川洋 Yoichi NINAGAWA

株式会社クラレ 常勤監査役・日本化学会 産学交流委員長



今、日本の化学産業は大きな転換期にさしかかっている。悲観的に言えば危機的状況にある。経済活動がグローバル化する中で、原燃料価格の地域差が拡大し、日本の化学産業は大きなハンディキャップを背負っている。このハンディキャップを跳ね返すにはどうすればよいのか。個々の会社レベルでは、生産拠点を原燃料価格の有利な地域に設置するといったことがハンデを解消する一策であるが、日本の化学産業という視点から見ると十分とは言えない。また、原燃料価格の地域優位性がこのまま続くと言う保証はなく、原燃料価格の優位性のみで立地を決めると、後でしっぺ返しを食らうリスクもある。ここはハンデを解消するというより、ハンデをバネとして飛躍することを求めるべきだろう。その飛躍の源泉は何と言っても研究開発である。研究開発によってイノベーションが生まれ、日本の化学産業が飛躍することを願ってやまない。そのためには、何を差し置いても研究開発に従事する人達に元気になってもらわなければならない。

筆者はトータル43年の会社生活の最初の13年は研究開発、その後は市場開発、事業経営、技術経営といった仕事に従事してきた。その中であって、つくづく感じたのは「会社における研究開発は辛い仕事だ。しかし、一方でこれほど魅力的でやりがいがある仕事はない。」ということである。何故辛いのか、それは成果を生まない時期が圧倒的に長いからである。もちろん、節目、節目で研究開発としての成果は出ているのだが、会社という立場で考えると、事業化され、付加価値を生み出さなければ成果が出ているとは言えない。そして、成果を生まない期間も費用は確実に発生する。また、研究開発から事業化までの間には想定外のトラブルがあるのが当たり前であるが、トラブルを前提とした研究開発計画を立てることはないため、必然的に遅れが生ずる。この会社における研究開発の特性ともいえる「成果が出ていない、金喰い虫、遅い」は様々な層からの批判の対象になりやすい。この批判は的外れだとは思いますが、反論することもままならず、辛い思いをすることになる。

ここまで、辛いことばかり強調してきた。しかし、研究開発は未知との遭遇であり、それ自体魅力的なことは言うまでもない。その上、会社の研究開発は事業化され、付加価値を生み出すことにより、会社を發展させ、ステークホルダーに幸せをもたらすことができる。そうなる喜びもひとしおであり、会社における研究開発の醍醐味はここに尽きると言ってもよいだろう。かくして、「会社における研究開発は辛い、しかし、一方でこれほど魅力的でやりがいのある仕事はない」となるのである。

辛い仕事の中で高いモチベーションを維持し、大きな成果を目指して今日も研究開発に勤しむ人たちに、日本の化学産業の未来を託してエールを送りたい。

© 2014 The Chemical Society of Japan